The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	耕作放棄地から遊牧を考える
Author(s)	今岡, 良子
Citation	モンゴル研究. 2022, 31, p. 42-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102422
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《雑　感》

耕作放棄地から遊牧を考える

今 岡 良 子

はじめに

2021年春、耕作放棄地を借りて、農業を始めた。農業が初めてのモンゴル人の夫、2年だけ篠山町で黒豆を植えたということが唯一の農耕体験の私、この2人の取り組みである。畑は、自宅から歩いて、10分もかからない裏山にキジが舞い降りるサンクチュアリーのような里山の棚田の一番上である。その上の段は、舗装された道になっているので、散歩する農家の高齢者が声をかけてくれるコミュニケーションが楽しい。広さは、25m × 4m、雑草を刈り取り、土づくり。自宅で苗を備えて、ようやく定植を始めたのが5月だった。この畑で栽培したのは、二十日大根、えんどう豆、絹さや豆、きゅうり、プチトマト、とうもろこし、唐辛子、綿、ネギ類、フェンネル、レタス、キャベツ、ニンジン、ジャガイモ、キャベツ、ニンニク、イチゴである。

ここでは、耕作放棄地に向き合って、気づいたことを書いていきたいと思う。

（1）農業は土木工事

一年間使われていなかった畑は、雑草が深く根を張っている。その前は水田として使われていたので、粘土質の土壌である。保水力はあるが、水捌けが悪い。10センチも掘ると、青光りする銀色のドブの匂いの土が現れる。能勢町の和牛農家から堆肥をいただいたが、土壌改良が進み、サラサラの土になるには、まだ数年はかかりそうだ。とにかく、初年度は、水捌けをよくするために、畝を高くすることを考えた。

畝を作る前に、上の道路からザアザアと流れ込んでくる雨水の流れ出す水路を作り、また、下の段の畑の迷惑にならないところに水を注ぎ落とすために水路を切らなければならなかった。シャベルを差し込んで30cm ぐらいの深さの水路を作っていくと、シャベルの上の粘土状の土の中からミミズが出てきたり、サワカニが出てきたりする。その土には、ミミズやサワカニのエサとなる生き物がたくさんいるのだろう。畑を作るために水路を作る。水路を作るために、土を掘る。その土の中に生きている生物環境を破壊して、新しく人工的な畑という環境を作る。自分は自然を破壊しているのか？自然に親しみたかったのではないか？と自問しながら、自答に至らないまま、作業を続けた。農耕は、土木工事から始めることだと知った。

梅雨になり、畑は沼のようになった。夫はレインコートを着て、水路を新しく切った。下の畑の人は、去年はこんなことなかったのに、と首をかしげた。去年の梅雨の頃は、雑草が覆っていた。雑草の根を通じて、雨水は吸収され、表面に貯まることはなかったのだ。

シャベルで作る水路より、雑草の無数の根の水路の方が有益ということなのだろう。

それにしても、シャベルも、クワも、なかなか慣れない。体を使う仕事をしてこなかったから、自分の体の使い方になれていない。その上、柄が長いので、振り回されるし、太いので、握りきれず、力が入らない。ホームセンターには、女性用の花柄の手袋は売っているが、女性用の農具は売っていない。農家の嫁は、代々使われてきた農具を小さい時からあたりまえのように使いこなしてきたんだな。農家の子どもが農業以外の仕事を選べるようになった時代には、農家の母は自分の娘に男性サイズの農具になれることより、デスクワークをさせたいと思っても仕方ないかもしれない。

（2）遊牧は「楽」

定植後、苗が活着し、育っていくと、夫は「遊牧は楽だな」と言った。苗は、自分から動かないから、まず、水を与えなければならない。家畜は歩いて水場を探し、自分で水を飲む。次に、その作物に必要な栄養を含むよう土作りをし、栄養を根に運ぶ微生物を土の中に育まなければならない。家畜は自分で歩いて、自分が食べたい草を食べる。つまり、動くことのない作物の苗は、人間の赤ちゃんのように世話をしなければならない。家畜は、自分の意志で動き、自分で成長していく生き物である。牧民がついて行かなくても、放して牧することができる。ここで言う家畜とは、モンゴルで放牧されている мал マル のことである。

しかも、作物の背丈が低い間は、しゃがんで、体を小さくして、同じ作業を続けなければならない。農作業を終えて家に帰ると、シャワーを浴びて、ストレッチをして体を伸ばさないと、次の日に疲れを持ち越してしまう。мал は動く生き物なので、牧民の体の動きは家畜に合わせて、さまざまな動き方をする。мал との力比べの格闘も、ストレス発散にもなる。

人間が作物を育てるために二次的な自然環境を作り、そこで目標にあった収穫を得るには、人間自身が二次的自然の支配を受けるということなのか。雑草に栄養を取られないようにするには、雑草抜きが日々の重要な作業になる。

（3）「雑草」

もう少し、雑草について書いておこう。私は院生の頃、Унага というフィールドワークの学生チームといっしょに、篠山町の小多田地区の地域営農の勉強をし、黒豆を 1 町歩分、土づくりから始めて、定植、中耕、夏に収穫した枝豆の販売、冬に収穫した乾燥黒豆の栽培と販売を経験させていただいた。その頃、福岡政信の『わら一本の革命』に感動し、不耕起による自然農法に興味を持った。しかし、当時の私には、国民の食糧を満たすという観点から不耕起による自然農法より、畜産農家

を核とする有機農業の地域営農が現実的だと考えた。それからもう30年以上経ち、農村でのフィールドワークではなく、自分自身が農地を借りて農業をするようになり、改めて、youtube上の沢山の先生の農業の技術に学び始めると、不耕起による自然農法に取り組む人の多さに驚いた。その人たちは、耕す農業を「慣行農業」と呼ぶ。不耕起というのは、人間が土に鍬を差し込んで耕さないという意味で、作物や雑草の根が畑を耕すことを重視しているので、耕すことを否定しているわけではない。

不耕起による自然農法に取り組む人は、植物図鑑を読むことを薦める。例えば、トマトの原産地の土壌や気候はどのようなものであったか、ということから学んで、それを自分が栽培したい地域の土壌や気候との違いから、どのような手をいれたら、トマトは自分の能力を発揮するかを考える。

不耕起による自然農法に取り組む人は、雑草という草はないと考える。草それぞれに、そこで生育していることに意味がある。酸性土が好きな草は、その土の酸性の強さを教えてくれる。地下水をひきあげたり、畑の表土を覆て乾燥を防いだりする草もある。作物の芽が育つ時にいっしょに育つ草は、柔らかい芽が好きな「害虫」を引きつけてくれる。根だけ残して、茎と葉は作物の周囲に敷き藁のように置き、畑の乾燥を防ぎ、微生物が生きやすい環境を作る。自然農法に取り組む人にとっては、「雑草」にはそれぞれ使い勝手があるという。

不耕起による自然農法に取り組む人は、一つの畝に様々な作物を植える。これを密植という。作物の組み合わせを説明する時に「コンパニオン・プランツ」、「バンカー・アップ・プランツ」という言葉を使う。

「コンパニオン・プランツ」とは、いっしょに植えることでいい影響を与え合う共栄植物のこと。代表的なのはマリーゴールド。その根からセンチュウを遠ざける物質を出し、葉の香りはアブラムシを遠ざける。クローバーのようなマメ科の植物は、その根に空中窒素を固定する根粒細菌がいて、肥料を作ることは知られている。私たちの畑でトマトを植える時にはバジルと落花生、きゅうりを植える時にはネギ、いちごを植える時にはにんにくを共存させた。「コンパニオン・プランツ」という言葉は、ホームセンターの野菜の苗売り場で注意深く見ると、詳しい説明を書いて紹介されている。

「バンカー・アップ・プランツ」とは、おとりになって、作物を守る役割を果たす植物である。例えば、オオバコはうどん粉病にかかりやすく、また、うどん粉病菌に寄生する菌を増やすことができる。きゅうりやエンドウマメをうどん粉病から守るガードマンになる。ムギ類も、同じくうどん粉病にかかりやすく、その寄生菌を増やし、そのわらはイナワラと同じく作物を寒さや乾燥から守り、土壌微生物を増やす。2022年はネグサレタイジという異名を持つエンバクを植えてみるつもりである。

こうして、共存共栄させる畑の植物に興味を持つと、1980年代後半のモンゴル人民共和国で、農牧業ネグデルの家畜を小種多頭飼いではなく、それ以前の五畜を共同体で飼うべきだという議論

を思い出す。羊や山羊という小家畜と馬は、食べる牧草の種類や食べる部位が異なっている、雪の深い日は足の長い馬や牛などの大家畜を先に放牧してから、小家畜を放牧した方がいいという牧民の様々な経験をもとに語られた。現在、モンゴルでは多種多頭飼いになっているが、あらためて、思い出すべき議論であると思う。

そして、小さな畝に、多くの種類の作物を密植することができるのは、自分で食べるために育てる家庭菜園に向いている。私のような農業初心者でも、豊作に恵まれる。やはり、旬のものは、自分で作って食べるべきだと思った。旬以外の時期は、プロの農家さんの作物を買って食べる。農家の高齢化が進み、日本の食糧自給率の低さが問題になるが、まずは、自分で作ってみることから食糧問題を解決してみてはどうか、と思う。

(4) 土づくり

定植の後、本葉を増やしながら生長し、背が高くなると、強い風で倒れやすくなる。そのため、茎の根本に土寄せをする作業は、台風の前にはかかせない。最初から高い畝を作り、土を使ってしまった私たちは、定植と同時に土づくりをしなければならなかった。山の落ち葉を集めて、段ボールに詰め、ぬかを入れ、土づくりを始めた。落ち葉の下にはすでに黒い土があり、その中に生きている菌が増えていく。土づくりを始めてから、台所から出る野菜の切り屑はすべて、菌たちのご飯となり、生ゴミの量が10分の1に減少した。食事のあとの片付けで、菌たちのご飯を刻むことは、大変楽しいことであった。

ウランバートルで木を植えて育てていた夫は、ハルショロー（黒い土）を買ってきて、培養土としたそうだ。それは、草原の土を袋詰めされたものだという。確かに、世界でもっとも肥沃な土は、チョルノーゼム（黒い土）であり、草原の土である。

ある自然農法家は、土づくりをする時には、植物の葉や茎が常に堆積するようにして腐葉土を作ることを勧めている。山の落ち葉は腐葉土となり、いい堆肥になることが知られているが、木の影によって、山の土には直接日光があたりにくい。それに比べて、草原は日光を遮るものがなく、日出から日没まで太陽の恩恵を受ける。前年の枯れた茎や葉の分解は早く、土に速くかえっていく。

草原が最も豊かな土を生み出すということを考えると、降水量が少なく「草しか生えない」ので、遊牧をしているという言説は、間違っている。草原が豊かな土を作り出すので、草も生えるし、その土の肥沃さを農耕民は求めるのである。土づくりの経験が発酵し、草原の価値を高めることにつながるように考察を深めていきたいと思う。

(5) 加工

５月に定植した夏野菜は、７月になると実を大きくし始めた。最初は、きゅうりから収穫が始まった。きゅうりの黄色い花に谷向いのみつばちがやってきて、受粉を助けてくれ、きゅうりは大豊作

だった。朝だけで、30本も収穫したことがあった。朝、まだ小さいなとその前を通り過ぎ、夕方見ると、急に大きくなっていることがあった。それを見過ごすと、お化けきゅうりになるという。お化けきゅうりは、出荷する場合、規格外とされるが、家で食べる分には美味しいきゅうりである。1日に10本収穫しても、水分摂取の代わりにきゅうりを丸ごと食べて、食事には必ずサラダ代わりに食べるようにしても、二人暮らしには十分過ぎる。たちまち冷蔵庫の野菜室はいっぱいになる。近所に配ったり、散歩の人に手渡したり、大学の同僚や学生に配っても、冷蔵庫はいっぱいになる。あらためて、気づいたことは、直菜園で作るということは、一斉に収穫した作物を自分で食べるということで、収穫後どう食べるかを考えないといけないということだった。お店で、その日食べる分だけを買ってきて、食べるのとは違うのだ。

しかも、ハウス栽培をしないので、栽培適期以外は食べられないことになる。そもそも、5月に定植して、2ヶ月半経たないと収穫できなかったため、その間、きゅうりは買って食べるしかない。自分で作ったから、自給できるとは限らないのである。やはり、収穫後、どう保存し、長く食べていくかが重要になる。

トマトは、結実する頃に雨が続き、太陽がカーッと照る日が少なかったため、水臭い、味のしないトマトが大豊作となった。そのため、他人にもさしあげられない。結局、玉ねぎと肉を入れて、ミートソースにして冷凍保存することにした。保存するにもお金がかかるものだ。これでまた、冷凍庫がいっぱいになった。

キャベツも同時に大きなキャベツがいくつも採れたので、近所にさしあげた残りは、瓶詰め保存した。ロシアやドイツのyoutubeを見て、ザワークラフトの瓶詰めをいくつも作って保存した。ヨーロッパではガラス瓶ごと鍋で煮沸し、雑菌を入れないようにして、1年間保存しながら食べるという。ウランバートルのお店で旧東欧から輸入する野菜の瓶詰めは、こうして作られていたのだろう。

(2)のところで、「遊牧は楽だ」ということを書いた。遊牧ではなく、「放牧は楽だ」と書いた方がいいかもしれない。мал が自律している分、天候が穏やかであれば、放牧に手間はかからず、その分、夏はミルクの加工に時間とエネルギーを集中させ、冬の食料の準備を始めることができる。逆に、家畜の飼育に労力がかかると、加工に手をまわせなくなる。日本の酪農家が搾乳しても、乳製品を作らなかったのは、乳加工の経験が伝統的に定着していなかったことが主な理由だが、高温多湿な日本の気候風土で、泌乳量の多い牛の体調管理に手間がかかったことも考えられる。北海道旭川市の山地酪農の先駆けの斎藤晶牧場、その斎藤晶さんは、「牛を山に放牧すると、山から勝手にミルクが流れてくる。それを受け止めるだけでいいのさ」と笑顔で話していたことを思い出す。мал が自分のできることを自分ですることにより、人間はその恵みを大切に、長期に渡って利用する加工技術に力を入れることができる。牧民の労働における放牧と加工のバランスは、とても重要だと思った。

おわりに

実は、私たち夫婦は、2021年３月に、豊岡市但東町に通い、牛や羊を放牧して飼う山地を探していた。但馬の東、但東町。その９割を山が占める町でも、新規畜産農家は、畜産公害を気にする住民によって、受け入れにくいことがわかった。私たちの住む町の隣町の能勢町においても、同じである。家畜を飼うことは少し先になりそうなので、家の近くに耕作放棄地を借りてみた。土に向き合い、作業をしながら、常に頭に浮かぶのが、遊牧のことであり、その一つ一つが新鮮な発見であった。どうして、もっと早く、自分でやろうとしなかったのだろうか、と後悔すらする。コロナ禍がくれた貴重な機会と言えよう。私のご近所にお住まいで、茨木市に馬を５頭飼って暮らす女性がいる。北摂の人口減少も止まらず､家畜の力を借りて暮らすことを探っていく仲間が増えてきた。まだまだ家畜を飼う夢は諦めてはいない。

今、イチゴとにんにくは、冬眠中。葉を地面すれすれに広げたロゼッタ姿勢で寒風に耐えている。５月のゴールデンウィークの頃には、アライグマと奪い合うほど、収穫を楽しんでいるだろう。

（いまおか　りょうこ）